

京都市環境基本計画

年次報告書(案)
～平成 28 年度事業実績～
(構成イメージ)

京都市

< 目 次 >

1. 京都市環境基本計画の概要

1 計画の位置付け

2 計画の期間

3 計画の体系

4 計画の推進

2. 計画の進行管理における点検・評価方法

1 基本的な考え方

本計画の進行管理は、各長期的目標及び基本施策の進行状況を把握するための指標として設定している「環境指標」を用いて行う。

「環境指標」には、施策・取組の状況を客観的な数値により把握して評価を行う「客観的指標」と、市民アンケート調査（以下「アンケート調査」という。）により市民の皆様の実感度を把握して評価を行う「主観的指標」があり、計画の点検・評価においては、客観・主観の両面から総合的な評価を行う。

2 環境指標による点検・評価方法

(1) 客観的指標

客観的指標については、平成26年度の実績値を基準値として、平成32年度の目標値までの値を各年度に均等に割り付けて、年度ごとの目標値（以下「年度目標値」という。）を設定し、年度目標値に対する実績値の達成率に応じて、5段階で評価する。（達成率の評価区分は表1のとおり。）

また、客観的指標のうち、「大気汚染に係る市保全基準※の達成状況」及び「水質汚濁に係る市保全基準達成状況」については、市保全基準が可及的速やかに達成するよう努めるものであることから、計画期間中における年度目標値は年度に関わらず100%とする。

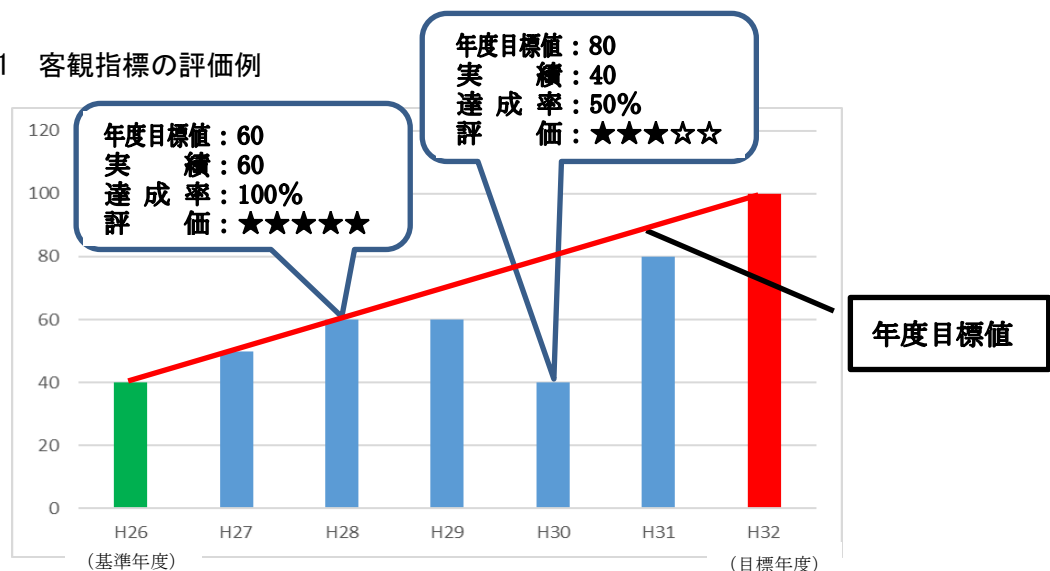
なお、本計画の年度目標値は、計画の進捗状況を分かりやすく表すため、点検・評価の統一的な評価基準として設定したものであり、他の計画等の目標値と一致しないことがある。

※ 京都市環境保全基準。市民の健康を保護し、快適な生活環境及び良好な自然環境を保全するうえで維持されることが望ましい基準として、国で定める環境基準より厳しい基準等を本市が独自に制定しているもの。

表 2.1 客観的指標の評価区分

評 価	年度目標値に対する実績値の達成率	大気汚染、水質汚濁に係る市保全基準達成状況
★★★★★	100%以上	実績値が80%以上
★★★★☆	80%以上100%未満	60%以上 80%未満
★★★☆☆	60%以上80%未満	40%以上 60%未満
★★☆☆☆	40%以上60%未満	20%以上40%未満
★☆☆☆☆	40%未満	20%未満

図 2.1 客観指標の評価例



(2) 主観的指標

主観的指標については、市民 1,000 人に対して行ったアンケート調査において、5つの選択肢から、各指標に対する実感度として最も近いものを選択していただくことにより、実績を把握した。また、指標の評価については、アンケート結果に対し、表2のとおり配点し、これらの合計を回答者数で除した数値により、以下のとおり評価することとした。

表 2.2 アンケート結果の配点

アンケートの選択項目	配点
そう感じる	2点
まあそう感じる	1点
どちらとも言えない	0点
あまりそう感じない	-1点
そう感じない	-2点

表 2.3 主観的指標の評価区分

評 価 (市民実感度)	評価数値
★★★★★ (とても高い)	0.5以上
★★★★☆ (やや高い)	0.1以上 0.5未満
★★★☆☆ (どちらとも言えない)	-0.1以上 0.1未満
★★☆☆☆ (やや低い)	-0.5以上 -0.1未満
★☆☆☆☆ (とても低い)	-0.5未満

< 計算例 >

1,000人の回答者のうち、
「そう感じる」の回答数が150人、「まあそう感じる」の回答数が200人、
「どちらとも言えない」の回答数が300人、
「あまりそう感じない」の回答数が250人、「そう感じない」の回答数が100人であった場合

$$\frac{2 \times 150 + 1 \times 200 + 0 \times 300 + (-1) \times 250 + (-2) \times 100}{1000} = 0.05$$

⇒ 「-0.1以上 0.1未満」であるため、「★★★☆☆(どちらとも言えない)」の評価となる。

(参考) アンケート調査の実施概要

- 調査方法：インターネットリサーチ
- 調査対象：京都市に在住する 15～79 歳の男女（1,000 人）
- 調査期間：平成 29 年 3 月 14 日～3 月 16 日

年齢	男性	女性
15～19歳	18	28
20代	73	72
30代	82	79
40代	95	97
50代	72	75
60～70代	142	167
total	482	518

3. 環境指標の評価結果一覧

客観的指標（11 項目）及び主観的指標（11 項目）の評価結果については、以下のとおりである。

長期的目標 1 持続可能な発展が可能となる低炭素のまち

客観的指標	年度目標値	実績（H27）	評価結果
温室効果ガス総排出量削減率 （H2 年度比）	4.3%	3.2%	74% 【★★★★☆】
エネルギー消費量削減率 （H22 年度比）	11.8%	12.0%	100%以上 【★★★★★】
再生可能エネルギー導入量	923TJ	895TJ	97% 【★★★★☆】

※ 「①温室効果ガス総排出量削減率」，「②エネルギー消費量削減率」及び「③再生可能エネルギー導入量」については、平成27年度の実績が最新である。

主観的指標	評価結果
豪雨や熱中症など地球温暖化の影響と思われる危機が自分たちの生活に迫りつつあると感じるか。	0.30 【★★★★☆】
徒歩や自転車，公共交通機関優先の取組が年々進んでいると感じるか。	－ 0.07 【★★★★☆】
省エネルギーや節電の取組みが年々進んでいると感じるか。	0.17 【★★★★☆】
再生可能エネルギー導入の取組が年々進んでいると感じるか。	－ 0.08 【★★★★☆】

長期的目標 2 自然環境と調和した快適で安全・安心なまち

客観的指標	年度目標値	実績（H28）	評価結果
大気汚染に係る市保全基準達成状況	100%	83.3%	83% 【★★★★★】
水質汚濁に係る市保全基準達成状況	100%	88.5%	89% 【★★★★★】
京の生きもの・文化協働再生 プロジェクト取組団体数	66 団体	166 団体	100%以上 【★★★★★】

主観的指標	評価結果
空気や河川の水がきれいに保たれていると感じるか。	0.18 【★★★★☆】
多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていると感じるか。	－ 0.09 【★★★★☆】
自然環境と調和した文化や暮らしが広がっていると感じるか。	－ 0.03 【★★★★☆】

長期的目標 3 資源・エネルギーの有効利用と環境負荷の低減を図る循環型のまち

客観的指標	年度目標値	実績（H28）	評価結果
一般廃棄物（ごみ）の市受入量	43.7 万トン	41.7 万トン	100%以上 【★★★★★】
ごみ焼却量	40.7 万トン	38.9 万トン	100%以上 【★★★★★】

主観的指標	評価結果
マイバッグの携帯などのごみを出さない暮らしが広がっていると感じるか。	0.78 【★★★★★】
ごみを分別して出せる拠点が身近にあり、ごみの分別・リサイクルが進んでいると感じるか。	0.64 【★★★★★】

長期的目標 4 環境保全を総合的に推進するためのひと・しくみづくり

客観的指標	年度目標値	実績（H28）	評価結果
環境保全活動プログラム参加者数	212,540 人	230,766 人	100%以上 【★★★★★】
京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数（再掲）	66 団体	166 団体	100%以上 【★★★★★】
K E S 認証保有件数	999 件	890 件	89% 【★★★★☆】

主観的指標	評価結果
学校や社会、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか。	0.11 【★★★★☆】
環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか。	0.01 【★★★☆☆】

全体の評価

4. 長期的目標ごとの進捗状況

長期的目標 1 持続可能な発展が可能となる低炭素のまち

市民、事業者との協働の下で、徹底した省エネルギー及び再生可能エネルギーの飛躍的な普及拡大、温室効果ガス排出量削減に寄与する環境・エネルギー関連産業の振興等を推進し、持続可能なエネルギー社会を実現すること等により、低炭素社会の構築を目指す。

《基本施策》

省エネルギーの促進や再生可能エネルギーの普及拡大等による地球温暖化対策の推進

1 環境指標の評価結果

(1) 客観的指標

エネルギー消費量削減率は年度目標値を達成したが、温室効果ガス総排出量削減率は年度目標値の74%、再生可能エネルギー導入量は97%の達成状況であった。

客観的指標	基準値 (年度)	年度目標値 (年度)	実績値 (年度)	評価結果 (達成度)	目標値 (年度)
①温室効果ガス 総排出量削減率 (H2 年度比)	0.2% (26 年度)	4.3% (27 年度)	3.2% (27 年度)	74% 【★★★★☆】	25% (32 年度)
②エネルギー 消費量削減率 (H22 年度比)	11.2% (26 年度)	11.8% (27 年度)	12.0% (27 年度)	100%以上 【★★★★★】	15% (32 年度)
③再生可能エネ ルギー導入量	770TJ (26 年度)	923TJ (27 年度)	895TJ (27 年度)	97% 【★★★★☆】	1,690TJ (32 年度)

※ 「①温室効果ガス総排出量削減率」、「②エネルギー消費量削減率」及び「③再生可能エネルギー導入量」については、平成27年度の実績が最新である。

(2) 主観的指標

市民の実感度については、地球温暖化に対する危機感や省エネ・節電の取組の進展に関して高い傾向にあり、公共交通機関優先の取組や再生可能エネルギーの導入の取組の進展に関しては「どちらとも言えない」との評価であった。

主観的指標	評価結果
①豪雨や熱中症など地球温暖化の影響と思われる危機が自分たちの生活に迫りつつあると感じるか	やや高い 【★★★★☆】
②徒歩や自転車、公共交通機関優先の取組が年々進んでいると感じるか	どちらとも言えない 【★★★★☆】
③省エネルギーや節電の取組みが年々進んでいると感じるか	やや高い 【★★★★☆】
④再生可能エネルギー導入の取組が年々進んでいると感じるか	どちらとも言えない 【★★★★☆】

2 基本施策の進捗状況

基本施策

省エネルギーの促進や再生可能エネルギーの普及拡大等による地球温暖化対策の推進

一人ひとりが環境にやさしい取組を当たり前のこととして実践し、京都ならではの創意工夫を生かした、省エネルギーをはじめとする環境にやさしいライフスタイルへの転換・定着を促進するとともに、太陽光や太陽熱、バイオマス（生物由来の資源）等の再生可能エネルギーを普及拡大し、エネルギーが地域循環するまちづくりを推進する。

また、人と公共交通優先の歩いて楽しいまちづくり、森を再生し「木の文化」を大切にするまちづくりを推進するとともに、環境に配慮した住宅の普及促進に取り組む。さらには、エネルギー効率の高い機器の導入など「事業活動の低炭素化」や、環境負荷の少ない優れた製品やサービス水素エネルギー等を提供する環境・エネルギー関連産業の振興を図る環境にやさしい経済活動を促進する。

これらと同時に、地球温暖化による避けられない影響への対応を図る「適応策」についても取組を進めていく。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
①温室効果ガス総排出量削減率 (H2 年度比)	①豪雨や熱中症など地球温暖化の影響と思われる危機が自分たちの生活に迫りつつあると感じるか
	②徒歩や自転車、公共交通機関優先の取組が年々進んでいると感じるか
②エネルギー消費量削減率 (H22 年度比)	③省エネルギーや節電の取組みが年々進んでいると感じるか
③再生可能エネルギー導入量	④再生可能エネルギー導入の取組が年々進んでいると感じるか

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

<客観的指標>

① 温室効果ガス総排出量削減率

平成 27 年度における温室効果ガス総排出量は約 759 万トンであったことから、「温室効果ガス総排出量削減率（H2 年度比）」は 3.2%となり、年度目標値（4.3%）に対する達成率は74%であった。年度目標値を達成しなかったものの、前年度（平成 26 年度）の削減率 0.2%と比較すると、削減率は大きくなった。

東日本大震災以降、原子力発電の稼働停止に伴う電力不足を火力発電により補い、火力発電に著しく依存した電源構成に変化したため、電気の CO₂排出係数が悪化したことによる増加分が約 114 万トンあるにもかかわらず、市民・事業者の皆様の省エネ・節電の取組が大きく貢献し、温室効果ガス総排出量は 3 年連続で減少している。

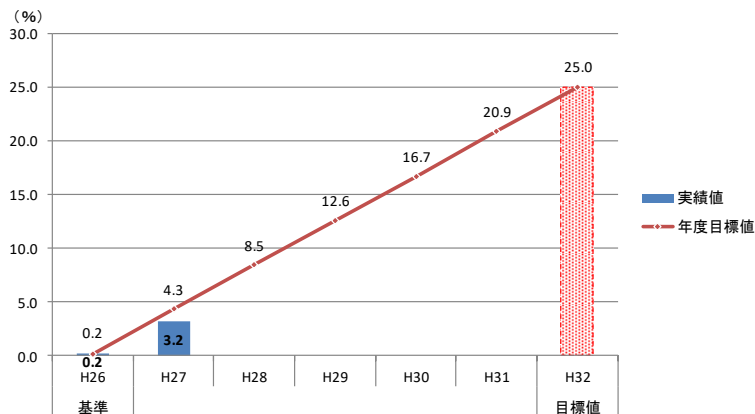


図 4.1 温室効果ガス総排出量削減率

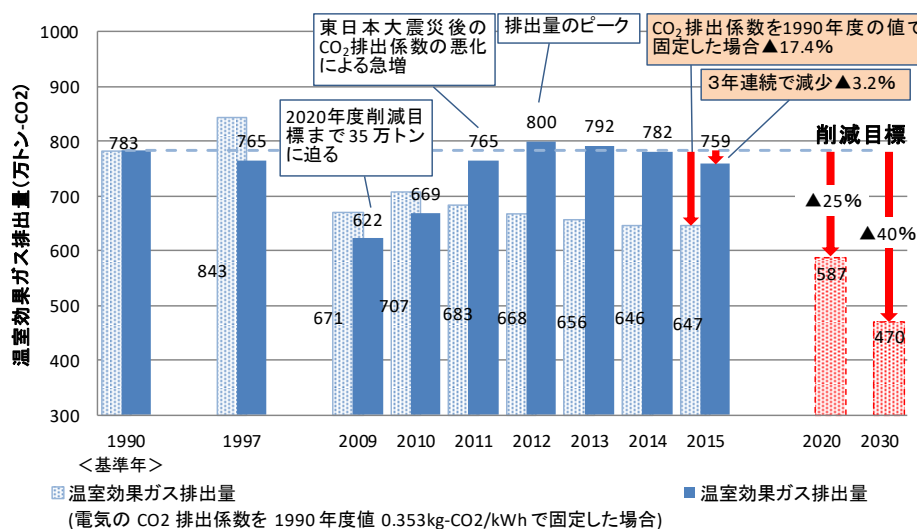


図 4.2 温室効果ガス総排出量

※ 「電気の CO₂ 排出係数」とは、1kWh を発電する際に排出される二酸化炭素（CO₂）量であり、発電の電源構成等で変動する。

② エネルギー消費量削減率

平成 27 年度における総エネルギー消費量は 76,946TJ であったことから、「エネルギー消費量削減率（H22 年度比）」は 12.0%となり、年度目標値 11.8%を上回って達成した。

なお、平成 27 年度のエネルギー消費量は、1990 年度以降で最も低い結果となっている。

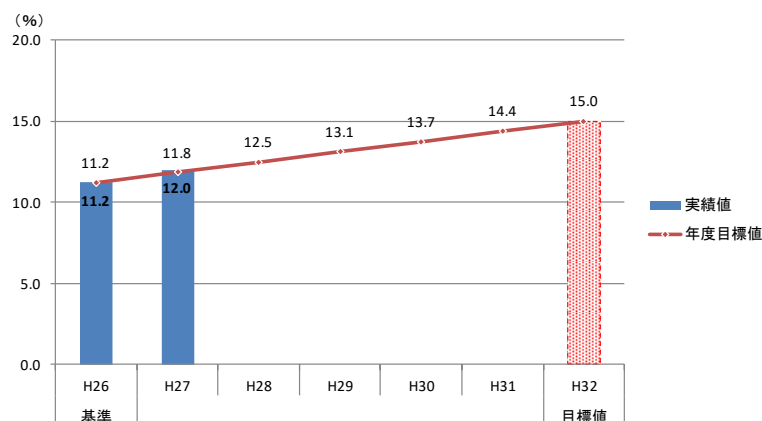


図 4.3 エネルギー消費量削減率

③ 再生可能エネルギー導入量

「再生可能エネルギー導入量」は 895TJ（平成 27 年度）であり，年度目標値（923TJ）に対する達成率は 97%と，概ね達成している状況であり，前年度の実績と比較して増加している。

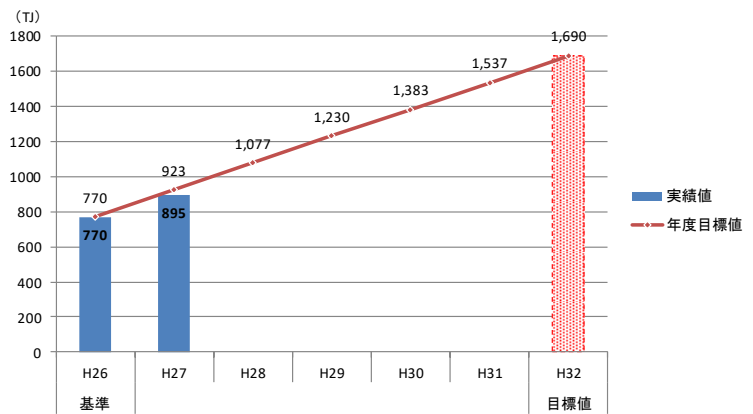


図 4.4 再生可能エネルギー導入量

<主観的指標>

① 豪雨や熱中症など地球温暖化の影響と思われる危機が自分たちの生活に迫りつつあると感じるか

本指標に対する「そう感じる」及び「まあそう感じる」の回答者の合計（以下「そう感じる計」という）は，51.4%であり，市民の実感度は「やや高い」との評価であった。

また，アンケート調査の際に，「地球温暖化対策に取り組むことによって，市民の皆様の生活の質を向上させると思いますか」との質問も同時に行ったところ，「そう感じる計」が 48.3%であった。

Q. 豪雨や熱中症など地球温暖化の影響と思われる危機が自分たちの生活に迫りつつあると感じるか

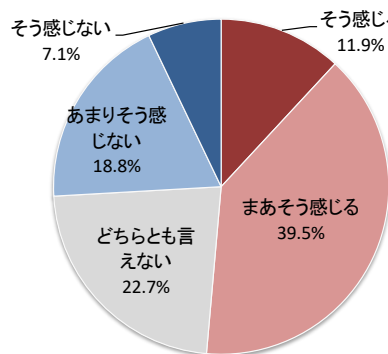


図 4.5 地球温暖化の影響実感

Q. 地球温暖化対策に取り組むことによって，市民の生活の質を向上させるとするか

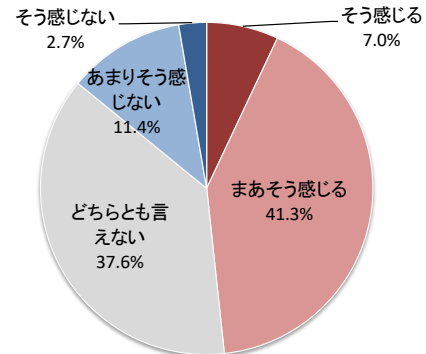


図 4.6 地球温暖化対策による生活の質向上

② 徒歩や自転車，公共交通機関優先の取組が年々進んでいると感じるか

本指標については，「どちらとも言えない」の回答が 36.0%と最も高く，「そう感じる計」が 30.3%と，徒歩や自転車，公共交通優先の取組が進んでいるかについて，市民の実感度としては，「どちらとも言えない」との評価であった。

一方，アンケート調査の際に「日頃から，徒歩や自転車，公共交通機関を優先した移動手段を取っていますか」との質問も同時に行ったところ，「十分取り組んでいる」，「ある程度取り組んでいる」と回答した人は全体の 80.0%であった。

Q. 徒歩や自転車，公共交通機関優先の取組が年々進んでいると感じるか

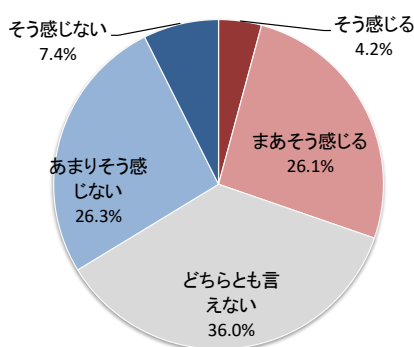


図 4.7 公共交通機関優先の取組実感

Q. 日頃から，徒歩や自転車，公共交通機関を優先した移動手段を取っているか

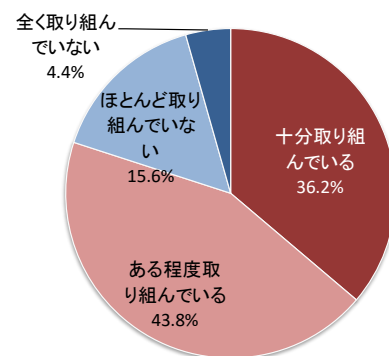


図 4.8 公共交通機関の優先利用

③ 省エネルギーや節電の取組みが年々進んでいると感じるか

本指標については、「そう感じる計」が 40.5%であり、市民の実感度は「やや高い」との評価であった。

また、アンケート調査の際に、「日頃から省エネに取り組んでいますか」との質問も同時に行ったところ、「十分取り組んでいる」、「ある程度取り組んでいる」と回答した人は全体の 77.3%であった。

Q. 省エネルギーや節電の取組みが年々進んでいると感じるか

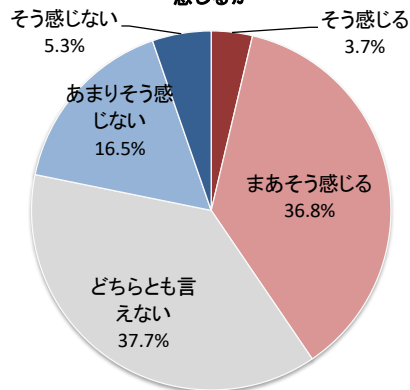


図 4.9 省エネルギー・節電の取組実感

Q. 日頃から省エネに取り組んでいるか

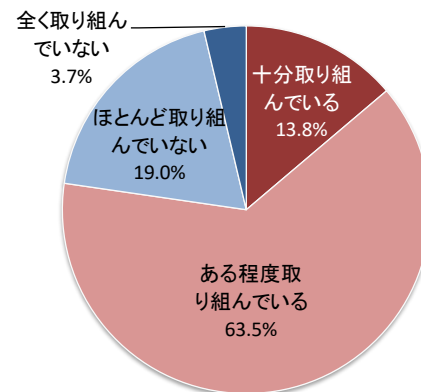


図 4.10 省エネの取組

④ 再生可能エネルギー導入の取組みが年々進んでいると感じるか

本指標については、「どちらとも言えない」の回答が 42.1%と最も高く、「そう感じる計」が 26.8%であり、再生可能エネルギー導入の取組みが進んでいるかについて、市民の実感度としては、「どちらとも言えない」との評価であった。

Q. 再生可能エネルギー導入の取組みが年々進んでいると感じるか

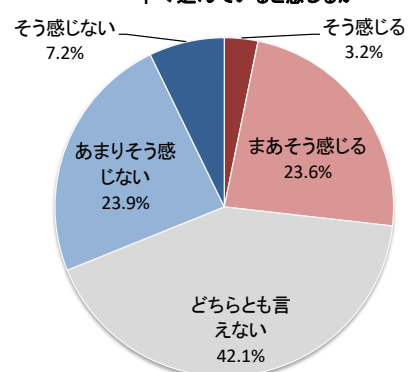


図 4.11 再生可能エネルギー導入の取組実感

<総評>

(温室効果ガス排出量について)

客観的指標の「温室効果ガス総排出量削減率」については、年度目標値は達成しなかったものの、削減率は、前年度（平成 26 年度）0.2%から、3.2%と大きくなっている。

また、主観的指標の「豪雨や熱中症など地球温暖化の影響と思われる危機が自分たちの生活に迫りつつあると感じるか」は「やや高い」との評価であり、アンケート調査の追加質問の「地球温暖化対策に取り組むことによって、市民の皆様の生活の質を向上させると感じますか」では、約半数の市民が「そう感じる」又は「まあそう感じる」と回答した。

このような一人ひとりの意識が、環境にやさしい行動の実践へと繋がり、温室効果ガス排出量の削減に寄与しているものと考えられるが、「温室効果ガス総排出量削減率」の目標値の達成に向けては、より一層、地球温暖化対策についての意識の向上及び行動の促進を図っていく必要がある。

こうしたことを踏まえ、更なる温室効果ガス削減に向け、「人と公共交通優先の歩いて楽しいまちづくり」や「環境にやさしいライフスタイルの普及」、「ごみの減量」など、様々な施策の融合を図りつつ、「京都市地球温暖化対策計画※」に掲げる取組を着実に推進していく。

※ 東日本大震災やパリ協定の発効などの社会情勢の変化を踏まえ、家庭部門及び業務部門の対策の強化や適応策の方向性の具体化を図るため、平成 29 年 3 月に改定を行った。

主観的指標の「徒歩や自転車、公共交通機関優先の取組が年々進んでいると感じるか」については、「どちらとも言えない」との評価であったものの、アンケート調査の追加質問の結果から、多くの人が、日頃から公共交通機関の利用を意識していると回答した。

実際の公共交通機関の利用者数は年々増加しており、温室効果ガス排出量の削減にも寄与しているものと考えられる。

今後も、一人ひとりの公共交通機関に対する意識の高まりに応えることができるよう、より一層、公共交通機関の利用促進に向けた取組や自転車利用環境の整備等を行い、市民の皆様に実感していただける、人と公共交通優先の歩いて楽しいまちづくりを進めていく。

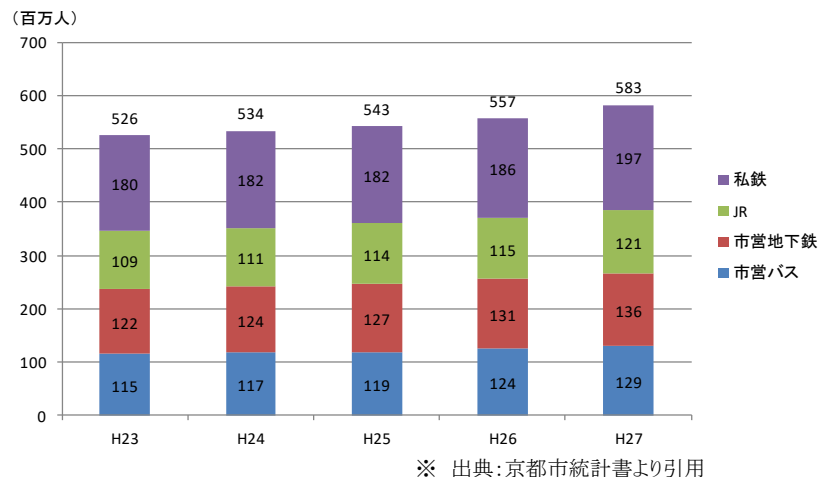


図 4.12 公共交通機関利用者数

（エネルギー消費について）

客観的指標の「エネルギー消費量削減率」については、市民、事業者の皆様の取組により、年度目標値を達成し、平成 2 年度以降で最も少ない結果となるとともに、主観的指標の「省エネルギーや節電の取組みが年々進んでいると感じるか」の実感度も高い傾向にあり、更にはアンケート調査の追加質問において、多くの人が日頃から省エネに「十分取り組んでいる」もしくは「ある程度取り組んでいる」と回答していることから、省エネの取組が広がっていることが分かる。

一方で、温室効果ガス排出量のうち、約 90%は、電気、ガス、燃料油等のエネルギー起源の CO₂であるとされており、平成 32 年度における温室効果ガス排出量及びエネルギー消費量削減率の達成に向けては、これまで以上の省エネの取組が求められる。

今後も、省エネルギーや節電の取組を進め、環境にやさしいライフスタイルへの転換・定着を促進していく。

（再生可能エネルギーについて）

客観的指標の「再生可能エネルギー導入量」については、年度目標値を概ね達成しているものの、主観的指標の「再生可能エネルギー導入の取組が年々進んでいると感じるか」については、「どちらとも言えない」との評価であった。

今後は、啓発イベントやホームページなどを通じて、創エネ・省エネ設備（太陽光発電システム、エネファーム等）の導入による環境負荷の低減効果や家計面及び防災面での導入メリットを分かりやすく伝えるなど、情報発信の一層の強化を図るとともに、小風力や地中熱など、現状では市内で活用が進んでいない再生可能エネルギーについても、今後の技術革新も注視しつつ、利用可能性を追求していく。

長期的目標 2 自然環境と調和した快適で安全・安心なまち

本市の豊かな自然環境を次の世代に引き継ぎ、多彩な文化・伝統が継承されるよう、大気、水、土壌などを良好な状態に保持・保全し、市民が安心して暮らすことができる公害のない安全・安心な環境を確保したうえで、優れた自然環境と調和した文化や暮らしが広がる、うるおいと安らぎのある快適なまちを目指す。

《基本施策》

- (1) 公害のない安全・安心な生活環境の保全
- (2) 生物多様性の恵み豊かな自然環境の保全
- (3) 自然環境と調和した文化や暮らしが広がる京都人らしい快適生活の確保

1 環境指標の評価結果

(1) 客観的指標

大気汚染、水質汚濁に係る市保全基準については 83%以上の達成率であり、京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数については、年度目標値、更には、平成 32 年度の目標値を達成した。

客観的指標	基準値 (年度)	年度目標値 (年度)	実績値 (年度)	評価結果 (達成度)	目標値 (年度)
①大気汚染に係る 市保全基準 達成状況※	77.6% (26 年度)	100.0% (28 年度)	83.3% (28 年度)	83% 【★★★★★】	100% (32 年度)
②水質汚濁に係る 市保全基準 達成状況※	88.0% (26 年度)	100.0% (28 年度)	88.5% (28 年度)	89% 【★★★★★】	100% (32 年度)
③京の生きもの・ 文化協働再生 プロジェクト 取組団体数	24 団体 (26 年度)	66 団体 (28 年度)	166 団体 (28 年度)	100%以上 【★★★★★】	150 団体 (32 年度)

※ 測定項目ごとの市保全基準達成割合(市保全基準を達成した測定地点数／全測定地点数)を平均したもの。

(2) 主観的指標

市民の実感度については、空気や河川の水のきれいさに関して高い傾向にあったが、多様な生きものが生息する良好な自然環境の保全や、自然環境と調和した文化や暮らしの広がりに関しては、「どちらとも言えない」との評価であった。

主観的指標	評価結果
①空気や河川の水がきれいに保たれていると感じるか	やや高い 【★★★★☆】
②多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていると感じるか	どちらとも言えない 【★★★★☆☆】
③自然環境と調和した文化や暮らしが広がっていると感じるか	どちらとも言えない 【★★★★☆☆】

2 基本施策の進捗状況

基本施策(1)

公害のない安全・安心な生活環境の保全

大気汚染、水質汚濁等について、維持されることが望ましい基準を定め、その測定を市内各所で行い監視するとともに、市民や事業者への公害防止に向けた啓発や指導を適切に行うことなどにより、市民の健康を守り、公害のない安全・安心な生活環境の保全に努める。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
①大気汚染に係る市保全基準達成状況	①空気や河川の水がきれいに保たれていると感じるか
②水質汚濁に係る市保全基準達成状況	

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

<客観的指標>

① 大気汚染に係る市保全基準達成状況

大気汚染に係る市保全基準達成状況は83.3%と概ね良好な状況であり、前年度(80.6%)と比較すると2.7%改善した。

具体的には、6つの測定項目のうち、二酸化硫黄、浮遊粒子状物質及び一酸化炭素については、昨年度に引き続き、全ての測定地点で基準を達成し、二酸化窒素及びPM2.5については、平成28年度に初めて、全ての測定地点で基準を達成した。

なお、残り1つの測定項目である光化学オキシダントについては、これまで基準を達成した測定地点はなく、平成28年度も同様の結果であった。

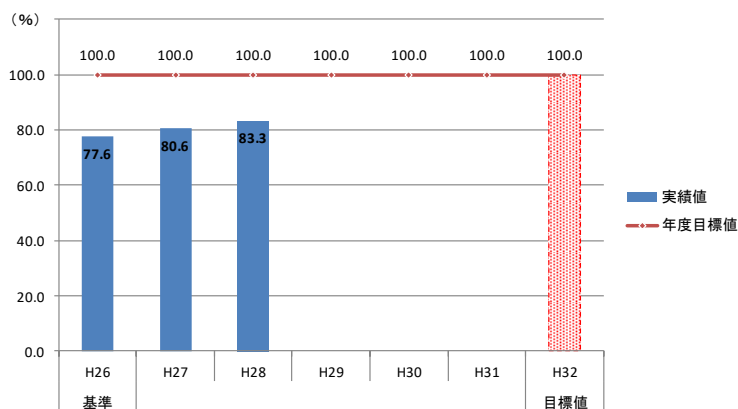


図 4.13 大気汚染に係る市保全基準達成状況

② 水質汚濁に係る市保全基準達成状況

水質汚濁に係る市保全基準達成状況は88.5%と、前年度(89.9%)から横ばいで、概ね良好な状況であった。

水質汚濁については、市内22河川42地点で、生活環境の保全に関する項目(11項目)及び人の健康の保護に関する項目(26項目)を調査しており、生活環境の保全に関する項目のうち、水質汚濁の代表的な指標であるBOD(生物化学的酸素要求量)については、調査を行った全地点(37地点)で基準を達成し、水生生物の保全に係る項目である全亜鉛等の3項目についても、調査を行った全地点(18地点)で基準を達成した。

また、人の健康の保護に関する項目(カドミウム、全シアン等)についても、調査を行った全地点(38地点)で基準を達成した。

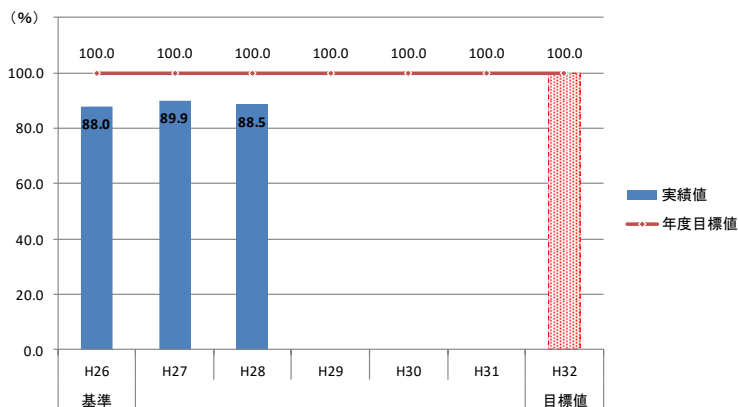


図 4.14 水質汚濁に係る市保全基準達成状況

<主観的指標>

① 空気や河川の水がきれいに保たれていると感じるか

本指標については、「そう感じる計」が41.4%であり、市民の実感度は「やや高い」との評価であった。

一方で、アンケート調査の際に「あまりそう感じない」、「そう感じない」と回答した人(全体の23.8%)を対象として、「なぜきれいに保たれていないと感じるか」との質問も同時に行ったところ、最も多かった理由が「河川における水のにごり、匂い、ごみの散乱による影響(67.6%)」であり、次いで「工場や自動車などからの排気ガスによる影響(39.5%)」、「空のかすみ、夜に見える星の数が減少(38.7%)」が挙げられた。

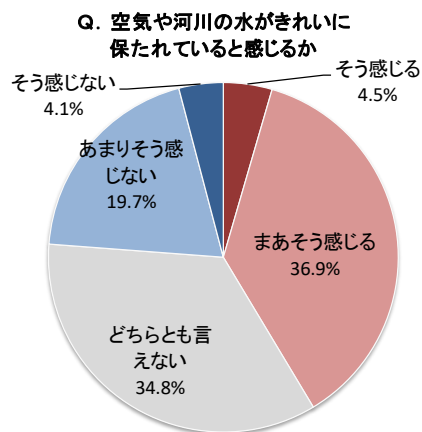


図 4.15 空気・河川のきれいさ保全実感

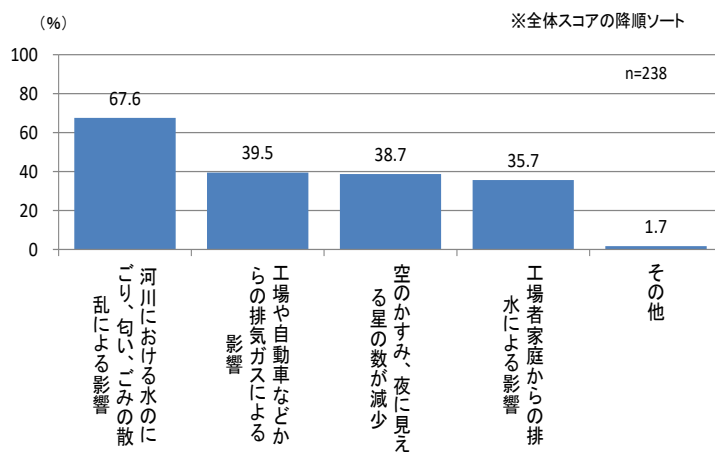


図 4.16 空気・河川のきれいさを感じない理由

<総評>

客観的指標の「大気汚染に係る市保全基準達成状況」及び「水質汚濁に係る市保全基準達成状況」については、市民の健康を守り、快適な生活環境及び自然環境を保全するうえで、概ね良好な状況であるとともに、主観的指標の「空気や河川の水がきれいに保たれていると感じるか」も実感度として「やや高い」との評価であった。

今後は、引き続き、市保全基準の達成率の更なる改善を図るとともに、市民がきれいを実感できる大気、河川水質を目指し、公害防止に向けた指導や啓発等を行っていく。

また、大気汚染や水質汚濁だけでなく、同様に市保全基準が定められている騒音、土壌汚染、悪臭等の状況についても、引き続き、指導や監視等を行っていく。

基本施策(2)

生物多様性の恵み豊かな自然環境の保全

(1) 目標

すべての人が生物多様性の恵みを私たちの生存や生活の基盤として再認識し、地域資源を生かした持続可能な暮らしや経済活動が行われている社会を目指して、生きものの生息環境を保全するとともに、生物多様性の保全を理解し行動する人づくりや活動を促す仕組みとネットワークづくり等を促進させることで、生物多様性の恵み豊かな自然環境の保全に努める。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
③京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数	②多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていると感じるか

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

<客観的指標>

③ 京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数は 166 団体であり、年度目標値の 66 団体を達成し、さらに、平成 32 年度の目標値も達成した。

平成 28 年度に、大幅に取組団体が増加した理由として、生物多様性の保全に関する取組・活動等を広く周知し、生物多様性の保全活動の輪を更に広げることを目的とした「未来へつなごう！京都の生物多様性（平成 28 年 3 月）」の冊子に、本プロジェクトの取組団体を掲載するなど、制度の周知を強化したことが一つの要因と考えられる。

本指標については、平成 32 年度の目標値を達成しているが、更なる取組団体数の増加を図っていく。

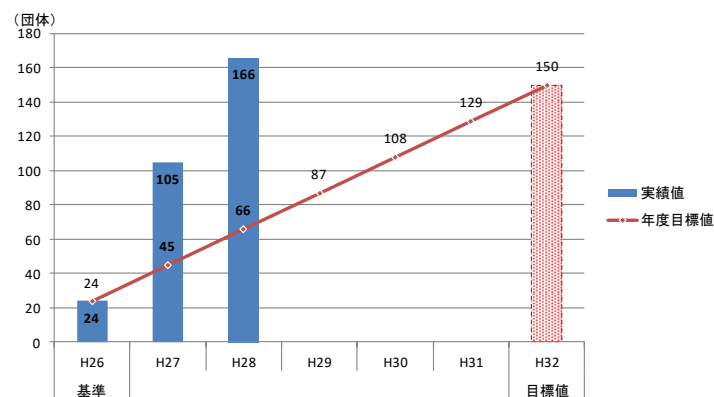


図 4.17 京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数

「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」とは、京都ならではの自然環境や伝統文化を後世に受け継ぐため、葵祭で使われるフタバアオイや祇園祭の粽（ちまき）に欠かせないチマキザサなど、京都の祭りや文化を支えてきた生きものの保全・再生のための取組を認定し、必要に応じて技術的な支援を行う専門家を派遣する制度であり、平成 26 年 9 月に創設した。

<主観的指標>

② 多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていると感じるか

本指標については、「どちらとも言えない」の回答が 41.7%と最も高く、「そう感じる計」は 26.4%であり、多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれているかについて、市民の実感度としては、「どちらとも言えない」との評価であった。

なお、アンケート調査の際に「あまりそう感じない」、「そう感じない」と回答した人（全体の 31.9%）を対象として、「多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていないと感じる理由は何ですか」との質問も同時に行ったところ、最も多かった理由は「開発等による自然の減少（48.3%）」であり、次いで「外来種の増加（48.0%）」、「生きものの数や種の減少（46.4%）」が挙げられた。

また、「『生物多様性』という言葉を知っているか」との質問を行ったところ、「聞いたことがあるが、言葉の意味は知らない」が最多で 34.3%、「知っているし、意味も理解している」、「知っているし、おおよその意味もわかる」と回答した人の合計は 42.3%であった。

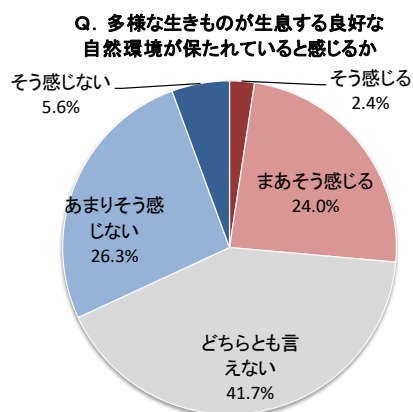


図 4.18 良好な自然環境保全実感

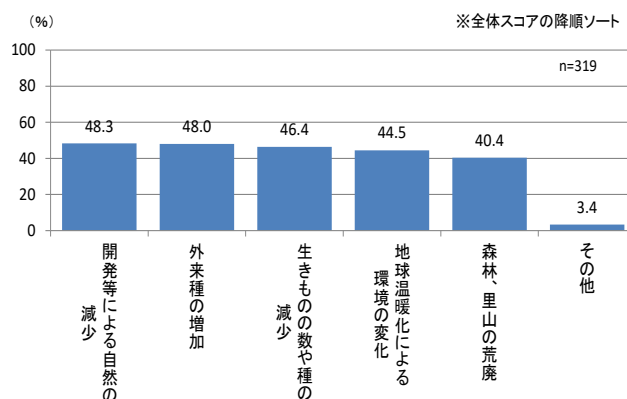


図 4.19 良好な自然環境が保たれていないと感じる理由

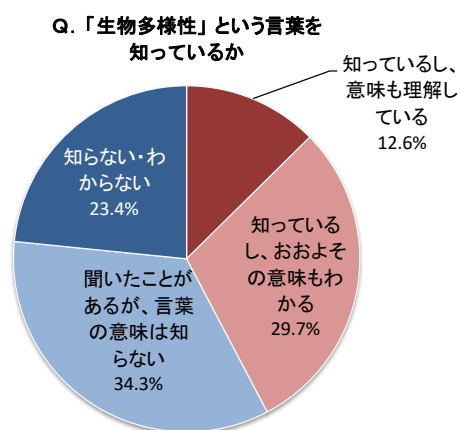


図 4.20 「生物多様性」用語認知

<総評>

客観的指標の「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数」は大幅に上昇し、平成32年度の目標値を達成したが、主観的指標の「多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていると感じるか」の評価は「どちらとも言えない」であり、「生物多様性」の言葉に対して一定以上の理解がある人も約4割と半数以下であった。

今後は、引き続き、生きものの生息環境の保全や外来種への対策など、自然環境の保全に関する取組を総合的に進め、市民が「多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれている」と実感できるような、生物多様性の恵み豊かな自然環境の保全を推進していく。

また、「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」をはじめとした、生物多様性の保全の活動を促す仕組みやネットワークづくりを行うとともに、自然観察会等を通じて、生物多様性の保全に向けて行動する人づくりを行っていく。

基本施策(3)

自然環境と調和した文化や暮らしが広がる京都人らしい快適生活の確保

自然豊かな都市景観を保全するとともに、公園や身近な緑・水辺環境の整備等を進め、京都人らしい快適な暮らしの確保に努める。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
③京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数 <再掲>	③自然環境と調和した文化や暮らしが広がっていると感じるか

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

<客観的指標>

基本施策(2)「生物多様性の恵み豊かな自然環境の保全」の客観的指標「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数」と同様。(P.17)

<主観的指標>

③ 自然環境と調和した文化や暮らしが広がっていると感じるか

本指標については、「どちらとも言えない」の回答が43.3%と最も高く、「そう感じる計」が27.8%であり、自然環境と調和した文化や暮らしの広がりについて、市民の実感度としては、「どちらとも言えない」との評価であった。

なお、アンケート調査の際に「そう感じる」、「まあそう感じる」と回答した人を対象として、「自然環境と調和した文化や暮らしとして、どのようなものが広がっていると感じるか」との質問も同時に行ったところ、最も多かったのが「和食や京野菜などの食文化」で、6割近くの人が回答があったのに対し、「打ち水」、「しまつのころ」、「門掃き」を回答した人は、2割程度であった。

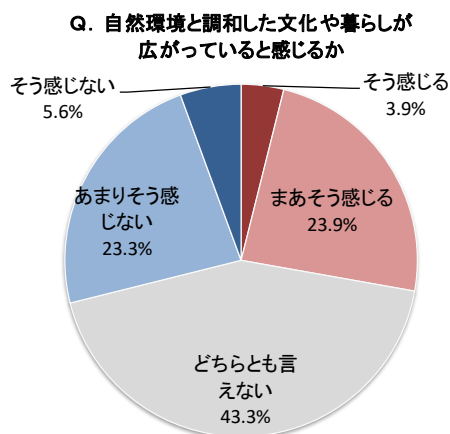


図 4.21 自然環境と調和した文化や暮らし実感

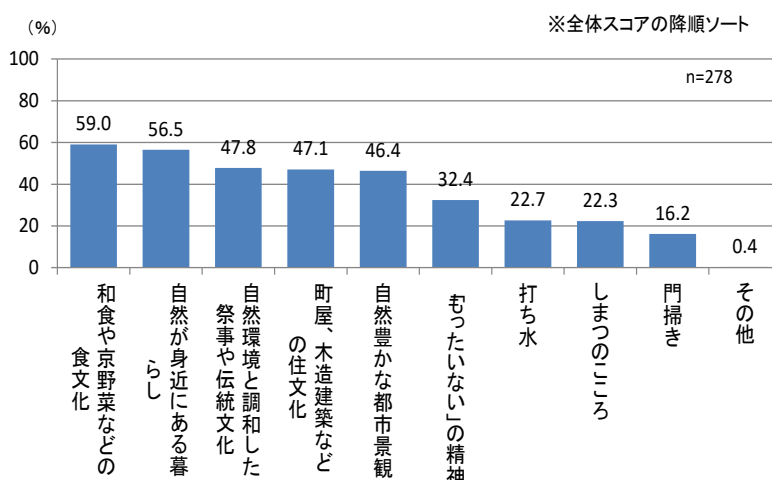


図 4.22 自然環境と調和した文化や暮らしの例

<総評>

客観的指標の「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数」は大幅に上昇し、平成32年度の目標値を達成したが、主観的指標の「自然環境と調和した文化や暮らしが広がっていると感じるか」は「どちらとも言えない」との評価であった。

今後は、市民の皆様により一層、自然環境と調和した文化や暮らしを実感していただけるよう、まちなかの緑化等により、身近に自然を感じることができ環境を整備するとともに、京都ならではの自然環境や伝統文化、景観、更には、「門掃き」、「しまつのころ」、「打ち水」等の先人たちの暮らしの中の工夫や習慣等について、その継承のための取組を行っていく。

また、引き続き、「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」をはじめとした、自然環境と調和した文化や暮らしを広げるための仕組みやネットワークづくりを行っていく。

長期的目標 3 資源・エネルギーの有効利用と環境負荷の低減を図る循環型のまち

本市では、2Rと分別・リサイクルの促進の2つを柱とするごみ減量施策を推進し、資源・エネルギーの有効利用と環境負荷の低減、さらには「もったいない」や「しまつ」といった京都らしいライフスタイルなどの定着を図り、市民、事業者の皆様とともに、全国のモデルとなる持続可能な循環型社会の構築を目指す。

《基本施策》

- (1) 2Rと分別・リサイクルの促進の2つを柱としたごみ減量の推進
- (2) 廃棄物の適正処理とエネルギーとしての有効活用

1 環境指標の評価結果

(1) 客観的指標

一般廃棄物（ごみ）の市受入量及びごみ焼却量については、いずれも年度目標値を達成した。

客観的指標	基準値 (年度)	年度目標値 (年度)	実績値 (年度)	評価結果 (達成度)	目標値 (年度)
①一般廃棄物 (ごみ)の市受入量※	46.1 万トン (26 年度)	43.7 万トン (28 年度)	41.7 万トン (28 年度)	100%以上 【★★★★★】	39 万トン (32 年度)
②ごみ焼却量	43.5 万トン (26 年度)	40.7 万トン (28 年度)	38.9 万トン (28 年度)	100%以上 【★★★★★】	35 万トン (32 年度)

※ 市受入量＝ごみ焼却量 ＋ 市資源化量 ＋ 直接埋立量

(2) 主観的指標

市民の実感度については、ごみを出さない暮らしやごみの分別・リサイクルの進展に関して、とても高いとの評価であった。

主観的指標	評価結果
①マイバッグの携帯などのごみを出さない暮らしが広がっていると感じるか	とても高い 【★★★★★】
②ごみを分別して出せる拠点が身近にあり、ごみの分別・リサイクルが進んでいると感じるか	とても高い 【★★★★★】

2 基本施策の進捗状況

基本施策(1)

2R と分別・リサイクルの促進の 2 つを柱としたごみ減量の推進

一般廃棄物については、手付かず食品や食べ残しといった「食品ロス」や、レジ袋の削減などの 2R を促進するとともに、雑がみなどの資源ごみの分別の義務化や、分別・リサイクルを促進することにより、ピーク時（平成 12 年度 82 万トン）からの「ごみ半減」（平成 32 年度までに 39 万トン）に向け、ごみの減量を加速していく。

産業廃棄物については、排出事業者や処理事業者が高い意識を持ち、廃棄物の発生抑制、再使用、リサイクルの促進をはじめとする環境保全の取組が実行できるよう、情報提供や啓発に努めるとともに、必要に応じた立入調査や指導等を適切に行い、違反行為等に対しては厳正かつ迅速に対応する。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
①一般廃棄物（ごみ）の市受入量	①マイバッグの携帯などのごみを出さない暮らしが広がっていると感じるか
②ごみ焼却量	②ごみを分別して出せる拠点が身近にあり、ごみの分別・リサイクルが進んでいると感じるか

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

<客観的指標>

① 一般廃棄物（ごみ）の市受入量

一般廃棄物（ごみ）の市受入量は 41.7 万トンと、前年度（44.0 万トン）から減少し、年度目標値 43.7 万トンを下回って達成した。

② ごみ焼却量

ごみ焼却量は 38.9 万トンと、前年度（41.2 万トン）から減少し、年度目標値の 40.7 万トンを下回って達成した。

市受入量及びごみ焼却量が減少した理由として、事業系ごみの雑がみ分別が進んだこと等が考えられる。

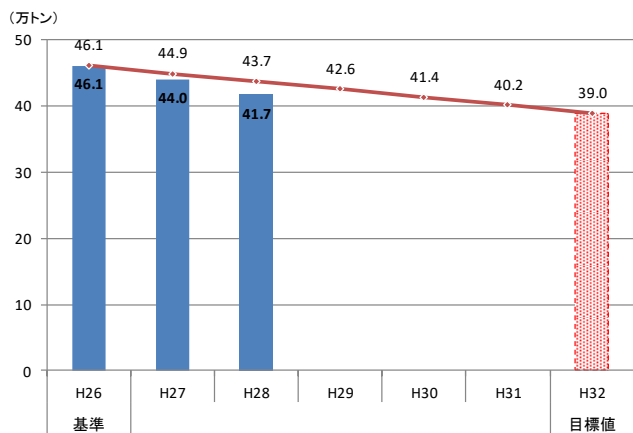


図 4.23 一般廃棄物（ごみ）の市受入量

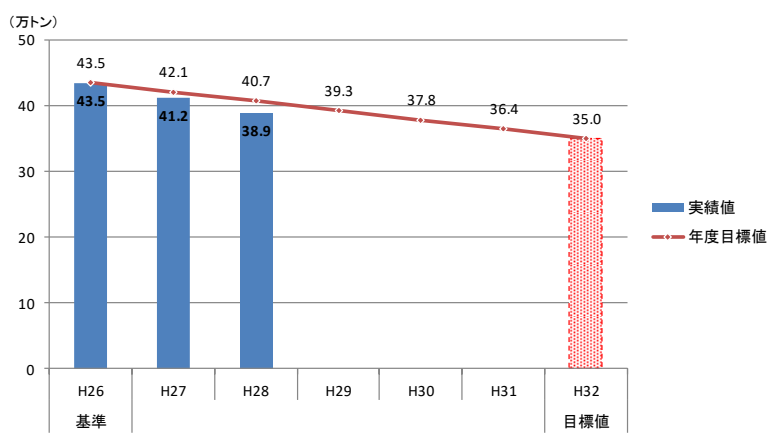


図 4.24 ごみ焼却量

<主観的指標>

① マイバッグの携帯などのごみを出さない暮らしが広がっていると感じるか

本指標については、「そう感じる計」が 71.6%であり、ごみを出さないリデュースの取組について、市民の実感度は「大変高い」との評価であった。

また、アンケート調査の際に「あなたは、日頃から、マイバッグを利用していますか」との質問も同時に行ったところ、「必ず利用している」が 48.6%で、「ある程度利用している」も含めると 85.8%であり、マイバッグの利用が実際の暮らしの中に定着していることが分かった。

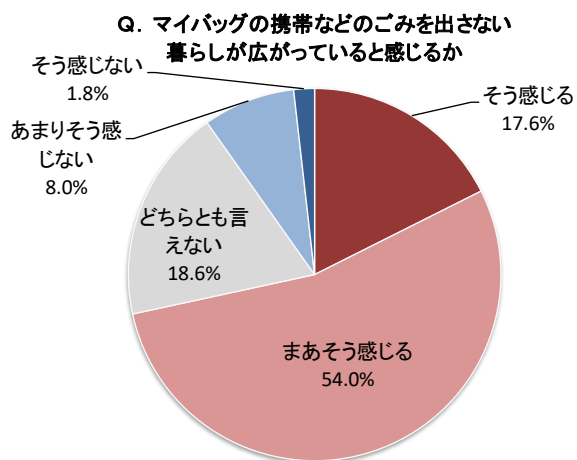


図 4.25 ごみを出さない暮らし実感

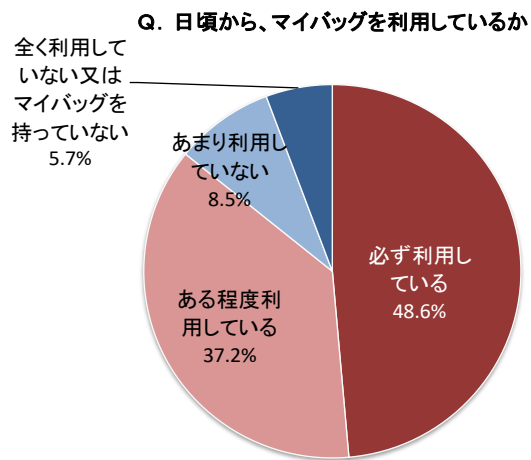


図 4.26 マイバッグの利用

② ごみを分別して出せる拠点が身近にあり、ごみの分別・リサイクルが進んでいると感じるか
 本指標については、「そう感じる計」が 66.2%であり、リサイクルの取組について、市民の実感度は「大変高い」との評価であった。

なお、3Rのうち、リユース（再使用）の取組に対する市民の実感度を把握するため、「傷んだり壊れたものを捨てずに修理して使うことや、フリーマーケットの利用など、リユース（再使用）が暮らしに広がっていると感じますか」との質問も追加で行ったところ、「そう感じる計」が 31.8%であり、主観的指標のリデュースやリサイクルの取組に対する実感度と比較すると、低い結果となった。

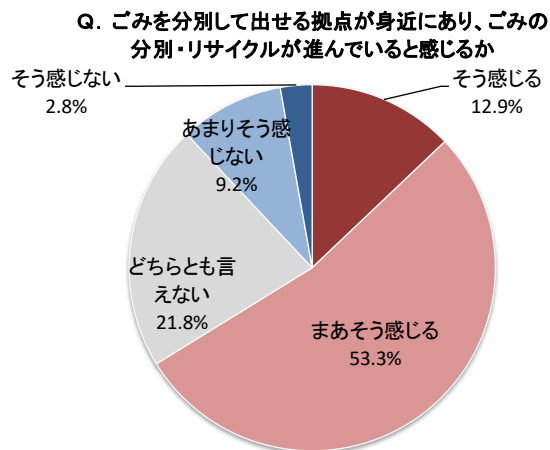


図 4.27 リサイクルの取組拡大実感

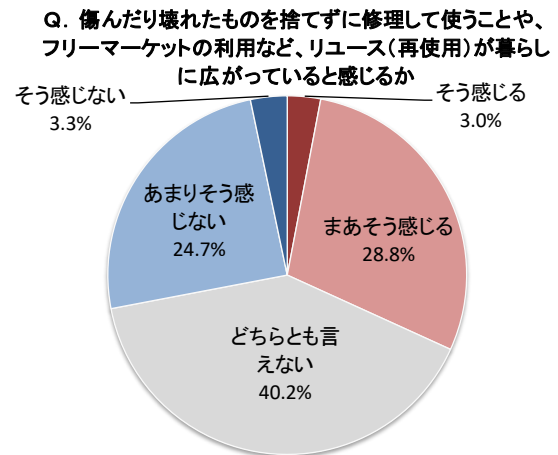


図 4.28 リユースの取組拡大実感

＜総評＞

客観的指標は、市民、事業者の皆様の取組により、ごみの減量が進んだことで、年度目標値を達成した。また、主観的指標の結果から、リデュースやリサイクルの取組が進んでいるという市民の実感度がとても高いことが分かった。

一方で、平成 32 年度の目標（平成 12 年度のピーク時の半分以下である 39 万トン）の達成に向けては、より一層、ごみの減量を進めていく必要がある。

家庭から出る燃やすごみの内訳を見ると、生ごみが約 4 割、紙ごみが約 3 割と、その大部分を占めており、生ごみについては、そのうちの約 4 割が手付かずの食品や食べ残し等の「食品ロス」であり、紙ごみについても、そのうちの約 4 割がリサイクル可能な「雑がみ」であることから、今後、紙ごみの分別徹底や食品ロスの削減に向けた周知・啓発を行うとともに、リデュースやリサイクルの取組と比較すると市民の実感度が低かった、リユースの取組を更に推進し、持続可能な循環型社会の構築を進めていく。

燃やすごみの内訳の図を掲載予定

基本施策(2)

廃棄物の適正処理とエネルギーとしての有効活用

一般廃棄物については、環境負荷の低減とごみ処理コストの削減を図りながら、適正処理を行い、安心・安全の確保等に関する施策を推進する。

また、徹底してごみの減量化を図ったうえで、それでもなお残ったごみについては、従前から行っている焼却熱によるごみ発電と、新たに実施するバイオガス発電を併用することにより、ごみの持つエネルギー回収を最大化し、有効利用を図る。

産業廃棄物については、排出事業者や処理事業者に対して、適正処理の確保に向けた指導・啓発を徹底するとともに、再生可能エネルギーの利用や熱回収といった環境に配慮した事業運営を呼び掛ける等、環境負荷の低減に向けた取組を進めていく。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
①一般廃棄物（ごみ）の市受入量 ＜再掲＞	①マイバッグの携帯などのごみを出さない暮らしが広がっていると感じるか＜再掲＞
②ごみ焼却量＜再掲＞	②ごみを分別して出せる拠点が身近にあり、ごみの分別・リサイクルが進んでいると感じるか ＜再掲＞

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

＜客観的指標，主観的指標＞

基本施策(1)「2R と分別・リサイクルの促進の 2 つを柱としたごみ減量の推進」の＜客観的指標＞，＜主観的指標＞と同様。（P. 23）

＜総評＞

一般廃棄物については，市内にある 3 箇所のクリーンセンター（南部第一，東北部，北部）において，周辺環境の保全に配慮しつつ，施設の適切な管理・運営に努め，適正に処理を行っている。

また，クリーンセンターでは，焼却熱によるごみ発電を実施しており，発電した電力は，クリーンセンター所内での利用のほか，温水プールやリサイクルセンターなどの関連施設に利用するとともに，余った電力については，電気事業者に売却している。

ごみ発電に当たっては，徹底した節電と発電量増加に努めることで，焼却するごみの持つエネルギーを最大限活用しているが，発電量は，燃料となる燃やすごみの減量が進んだことにより，減少傾向である。

今後も，引き続き，一般廃棄物の適正処理を行うとともに，現在建替え整備中の南部クリーンセンター第二工場（仮称）では，従前から行っている焼却熱によるごみ発電と，新たに実施するバイオガス発電を併用することにより，ごみの持つエネルギーの回収を最大化し，更なる有効利用を図っていく。

さらに，産業廃棄物については，「第 3 次京都市産業廃棄物処理指導計画」に基づき，引き続き，排出事業者及び処理業者に対する指導や情報提供等を実施し，適正な処理の確保に努めていく。

ごみ発電の実績についての図を掲載予定

長期的目標 4 環境保全を総合的に推進するための ひと・しくみづくり

長期的目標 1～3 の各分野を横断する長期的目標として、環境保全活動を主体的に進めることのできる「ひとづくり」と、市民・事業者も含めた各主体が協働して、環境保全活動に取り組むことのできる「しくみづくり」を掲げ、環境保全を総合的に推進する。

《基本施策》

- (1) 環境教育・学習を通じた理解と行動の促進及び人材育成
- (2) 広範な主体の協働による環境保全活動の促進
- (3) 地産地消をはじめとする環境にやさしい社会経済のしくみづくり
- (4) 他都市との連携及び国際的な取組の推進

1 環境指標の評価結果

(1) 客観的指標

環境保全活動プログラム参加者数及び京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数は、年度目標値を達成した。KES 認証保有件数については、年度目標値に対する達成度が 89%であり、概ね良好な結果であったが、昨年度からは減少した。

客観的指標	基準値 (年度)	年度目標値 (年度)	実績値 (年度)	評価結果 (達成度)	目標値 (年度)
①環境保全活動 プログラム参加者数	193,810 人 (26 年度)	212,540 人 (28 年度)	230,766 人 (28 年度)	100%以上 【★★★★★】	250,000 人 (32 年度)
②京の生きもの・文 化協働再生プロジェ クト取組団体数 <再掲>	24 団体 (26 年度)	66 団体 (28 年度)	166 団体 (28 年度)	100%以上 【★★★★★】	150 団体 (32 年度)
③KES 認証保有 件数	949 件 (26 年度)	999 件 (28 年度)	890 件 (28 年度)	89%以上 【★★★★☆】	1,100 件 (32 年度)

(2) 主観的指標

また、市民の実感度については、環境学習や環境保全活動の機会の広がりに関して、高い傾向であったが、環境に配慮したライフスタイルの広がりに関しては、「どちらとも言えない」との評価であった。

主観的指標	評価結果
①学校や社会、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか	やや高い 【★★★★☆】
②環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか	どちらとも言えない 【★★★★☆☆】

2 基本施策の進捗状況

基本施策(1)

環境教育・学習を通じた理解と行動の促進及び人材育成

既存施設の京エコロジーセンター（京都市環境保全活動センター）や北部・東北部クリーンセンターの啓発展示室に加えて、現在、整備を行っている南部クリーンセンター第二工場（仮称）に併設する環境学習施設を活用し、環境保全に関する理解と意識の向上を促す。

また、家庭、学校、地域、事業活動などの幅広い場で、ライフステージに応じた、市民・事業者への環境教育・学習の機会を充実させ、環境保全に関する自主的な行動を促すとともに、環境保全活動の中心を担う人材の育成に努める。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
①環境保全活動プログラム参加者数	①学校や社会、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか
	②環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

<客観的指標>

① 環境保全活動プログラム参加者数

環境保全活動プログラム参加者数は前年度から増加して 230,766 人となり、年度目標値の 212,540 人を達成した。

環境保全活動プログラムの参加者数は、京エコロジーセンターにおけるエコ学習や本市の環境学習関連事業への参加者数の合計であり、平成 28 年度の実績値が上昇した理由としては、平成 29 年 3 月に策定した「京都市環境教育・学習基本指針」により、本市における環境教育・学習についての考え方や方向性を示したことで、これまで以上に環境教育・学習の取組状況の把握が進んだことが要因と考えられる。

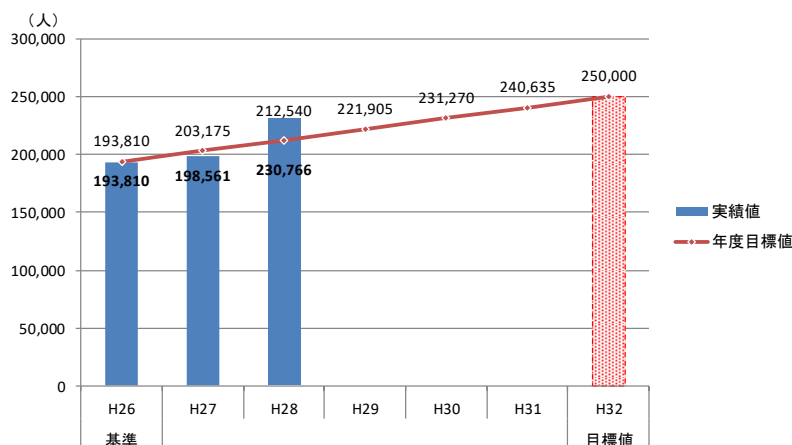


図 4.29 環境保全活動プログラム参加者数

<主観的指標>

① 学校や社会、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか

本指標については、「そう感じる計」が 32.0%であり、市民の実感度は「やや高い」との評価であった。

一方で、「どちらとも言えない」と回答した人が 47.0%と、約半数を占めるとともに、アンケート調査の際に追加で行った「環境教育・学習や環境保全活動に関する情報が十分に発信されていると思いますか」との質問に対しては、「そう思う」又は「まあそう思う」と回答した人が 16.8%と 2 割以下であった。

Q. 学校や会社、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか

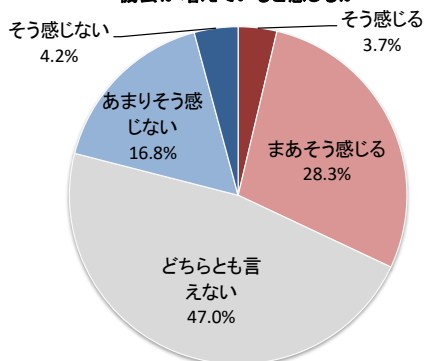


図 4.30 環境学習や環境保全活動の機会実感

Q. 環境教育・学習や環境保全活動に関する情報が十分に発信されていると思いますか

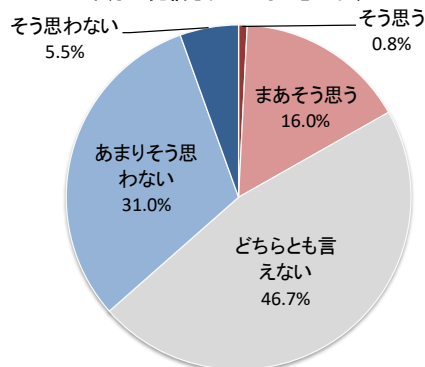


図 4.31 環境教育・学習や環境保全活動に関する情報の十分な発信

② 環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか

本指標については、「そう感じる計」が 27.6%であり、環境に配慮したライフスタイルの広がりについて、市民の実感度としては、「どちらとも言えない」との評価であった。

Q. 環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか

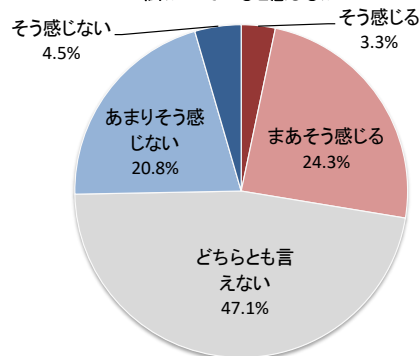


図 4.32 環境に配慮したライフスタイル実感

＜総評＞

客観的指標は年度目標値を達成し、主観的指標の「学校や会社、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか」についても、実感度として高い傾向であったことから、本市における環境学習の取組は一定広がっているものと考えられる。

一方、「環境教育・学習や環境保全活動に関する情報が十分に発信されていると思いますか」に対して「そう思う」又は「まあそう思う」と回答した人が２割以下であったことから、今後は、環境教育・学習の機会の提供や情報の発信について、更に充実させていく必要がある。

また、主観的指標の「環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか」については、「どちらとも言えない」との評価であったことから、今後は、環境問題やそれに関わる諸問題を自分自身の問題として捉え、環境保全のために自ら考え行動できる、持続可能な社会を構築する「担い手づくり」を更に促進することで、環境に配慮したライフスタイルへの転換を図っていく。

基本施策(2)

広範な主体の協働による環境保全活動の促進

市民、事業者、大学、環境保全活動団体、本市などの広範な主体が、協働して環境保全活動に取り組む仕組みを構築する。そのために、市民には、個人でも実践・参加できる環境保全活動等についての情報提供などを行い、事業者には、ISO14001、KES・環境マネジメントシステム・スタンダード等の認証普及や啓発などを行い、地域コミュニティには、環境保全についての理解を深めるための人材の派遣、団体間の交流・連携につながる情報提供などを行う。

さらに、観光客をはじめ、本市を訪れる皆様にも、本市が実施する環境の保全に関する施策に協力していただけるよう、情報提供や啓発を行う。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
②京の生きもの・文化協働再生プロジェクト 取組団体数<再掲>	①学校や社会、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか<再掲>
③KES認証保有件数	②環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか<再掲>

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

<客観的指標>

② 京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数<再掲>

「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数」は166団体であり、年度目標値の66団体を達成し、さらに、平成32年度の目標値も達成した。（詳細は、**長期的目標2**基本施策②「生物多様性の恵み豊かな自然環境の保全」の<客観的指標>参照。）

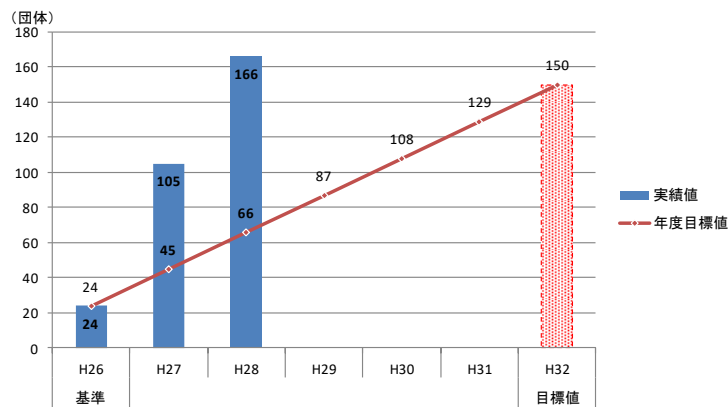


図 4.33 京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数<再掲>

③ KES 認証保有件数

KES 認証保有件数は 890 件と、前年度からやや減少し、年度目標値 999 件に対する達成率は 89%となった。

平成 28 年度において保有件数が減少した理由として、事業者の統廃合などにより、KES 認証を中止した事業者の数が、新規で認証を取得した事業者数を上回ったことが考えられる。

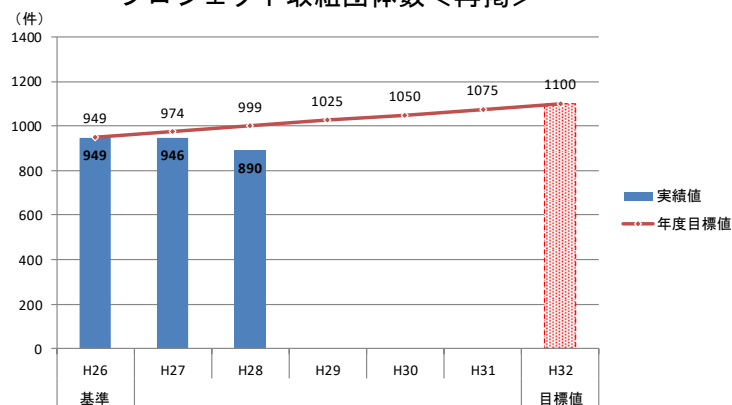


図 4.34 KES 認証保有件数

KES とは、「Kyoto Environmental Management System Standard(京都環境マネジメントシステムスタンダード)」の略号であり、中小企業をはじめ、あらゆる事業者の環境保全活動への参画を促進するため、「シンプル」で「低コスト」な取り組みやすい「環境マネジメントシステム」として策定された、京都発祥の規格である。

<主観的指標>

基本施策(1)「環境教育・学習を通じた理解と行動の促進及び人材育成」の<主観的指標>と同様。(P. 29)

<総評>

「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数」は年度目標値を達成しており、「KES 認証保有件数」についても、平成 28 年度において減少したものの、年度目標値は概ね達成している。また、主観的指標の「学校や社会、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか」についても、市民の実感度は「やや高い」との評価であったことから、本市における各主体との協働による環境保全活動の実施状況は、概ね良好であると考えられる。

また、このほかにも、様々な主体と協働して環境保全活動に取り組む仕組みづくりとして、地域ぐるみでエコ活動に取り組んでいる学区を「エコ学区」とし、環境学習会や省エネ診断会の開催など、学区の状況に応じた多様なプログラムの実施を支援する「エコ学区」関連事業や、環境保全活動を実践している個人又は団体を表彰する「京都環境賞」の実施なども行っている。

引き続き、市民、事業者、大学、環境保全活動団体等と協働・連携し、環境保全活動の促進を図っていく。

基本施策(3)

地産地消をはじめとする環境にやさしい社会経済のしくみづくり

京の旬野菜の振興，地域産木材等の利用促進などによる地産地消を進め，流通に係る二酸化炭素の排出量を削減し，環境にやさしい社会経済のしくみづくりを図る。

また，環境，経済，暮らしの豊かな調和に向けて，高い技術力や匠の技，産学公のネットワーク等，これまで京都が築きあげてきた様々な知恵を融合して環境関連産業を育成し，環境保全に関する技術開発を促進する。

併せて，環境保全活動団体や事業者等との連携により，環境負荷の小さいグリーン商品・サービス等の普及に努める。

(1) 関連する環境指標

客観的指標	主観的指標
—	②環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか<再掲>

(2) 平成 28 年度の主な取組

重点事業を中心に写真などを交えて掲載予定。

(3) 進捗状況

<主観的指標>

基本施策(1)「環境教育・学習を通じた理解と行動の促進及び人材育成」の「環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか」と同様。(P. 29)

<総評>

主観的指標の「環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか」については，「どちらとも言えない」との評価であったが，アンケート調査の際に追加で行った「京の旬野菜や地域産木材の利用促進等の地産地消，環境負荷の少ない商品の購入など，環境に配慮した消費生活を意識していますか」の質問については，「意識している」又は「まあ意識している」と回答した人の合計が44.8%と，約4割の人が地産地消等に少なからず取り組んでいることが分かった。

引き続き，京の旬野菜の振興や地域産木材等の利用促進，環境関連産業の育成等の取組を行っていく。

基本施策(4)

他都市との連携及び国際的な取組の推進

本市は、京都議定書誕生の地として、また、環境先進都市として、国内外の都市との情報交換や人材交流に努め、環境問題に関する国際会議や国際学会開催の促進・誘致を図るとともに、海外での会議にも積極的に参加し、本市の先進的な環境政策の発信などに努める。

(1) 関連する環境指標

なし

(2) 進捗状況

平成 28 年度は「イクレイヤー持続可能性をめざす自治体協議会」への参画や「K Y O T O 地球環境の殿堂」の取組等を行った。

また、独立行政法人国際協力機構（J I C A）の「草の根技術協力事業」を活用し、マレーシアのジョホール州イスカンダル開発地域において、本市の全小中学校で実施している「こどもエコライフチャレンジ」（子ども版環境家計簿を活用した環境学習プログラム）を基とした、マレーシア版教育プログラムの開発への協力を行った。

引き続き、国内外の都市との情報交換や人材交流に努め、地球環境問題の解決に向けて、国際的な取組を推進していく。